

八尾歴史物語

六十四巻

河内名所図会を歩く⑮ 江戸時代の景観と古民家(後編)

平野部の「つし二階」の古民

家に対して、山麓部は「大和棟」を中心としています。大和棟は、奈良盆地の周辺に多く分布していることからその名で呼ばれています。その特徴は、茅葺の急勾配の切妻造の大屋根とその下の短い瓦葺の屋根です。

『河内名所図会』では、前巻で述べたように民家の姿は簡略化されることが多いですが、現在の大阪府東大阪市と奈良県生駒市を結んだ暗越奈良街道の暗峠(椋ヶ嶺)の挿絵では、峠付近に茶屋や宿屋が並ぶなか、大和棟とわかる建物が1軒だけあります。大和棟はステータスを示す象徴的な建物で、



▲平野部の大和棟
(與兵衛桃林堂主屋)

きつちりと描かれたのでしょうか。

市内の大和棟は、およそ40軒が現存し、7割が山麓部にあります。東高野街道沿いの旧恩智村や十三街道沿いの旧神立村に多く残っています。

市内の現存するほとんどの大和棟が特徴である切妻屋根の茅葺をトタンなどで覆っていますが、5軒が茅葺を保持しています。屋根の葺き替えが材料の茅や職人の不足などで難しくなっており、美しい茅葺の大屋根を有する大和棟の歴史的景観は貴重です。(おわり)



▲暗峠の景観 (○が大和棟)

問 観光・文化財課

TEL 924・8555
FAX 924・3995